



体験版

「……っ、ねえ、もつと……っ」

切なげに伸ばされた手のひらが、きつく枕をつかむ。届かない相手へのもどかしさを精一杯埋めるように、ユイは握り締めた枕を引き寄せ、ぎゅつと両腕に抱く。

あどけない口調は、けれどこれからの行為への期待で甘く濡れていた。シーツの上に大胆に広げられた脚の付け根では、繊細なつくりの花片がすっかりほころび、ぷくりと吹いた蜜にまみれて薄紅色の花芯を覗かせている。

「ね、クロス……っ、もつと、して……っ」

高鳴る胸を隠すように枕を胸元に押し付けて、一糸まとわぬ姿となった少女は、大胆に腰を持ち上げて、愛しい相手の名を呼んだ。

——わおうんっ!!

少女の声に力強く尻尾を振って答えたのは、体高80センチを越える巨躯。雪のように白い冬毛をした一歳十一か月の大型犬だった。穏やかな顔つきとは裏腹に、獣の大きな口

は舌を伸ばして荒い息を繰り返す、その眼は情欲にぎらぎらとぬめっている。

一糸まとわぬ少女の裸身を前にして、雄犬の後肢の間からは、既に赤黒く歪な格好の生殖器が飛び出していた。

「んう、クロス、はやくう……っ」

てらてらと粘液にぬめり光る肉杭の前に、ユイはこくりと小さく喉を鳴らし、切なげに繰り返す。

待ち切れぬとばかり、少女の細い指は身体の後ろ回って小さな蜜壺の入り口を掻き回し、甘く淫らな音を響かせる。もう一方の手で胸に枕を押しつけ、つつましやかな膨らみの先端を布地に擦りつけながら、少女はパートナーを呼び寄せる。

「わうっ!!」

雄犬は再度吼えてそれに答えると、手慣れた様子で少女の身体へと覆いかぶさった。もこもこの毛皮が、小柄なユイの裸身をすっぽりと覆う。

「あ、あつ、あ……っ」

クロスの下腹から張り出した野太い肉杭——成人男性のそれにも勝る太さと大きさの生殖器が、不釣り合いなほどに小柄な少女の脚の付け根、狭く細い孔の口へと押し当てられてゆく。興奮にヒク付き、細く食い込んだ柔肉裂に歪な肉杭が強く擦りつけられると、少女の柔孔は白く濁った蜜をこぼりと嘔き出した。

ユイの上にまたがった雄犬は、少女の腰を抱え込むように前脚をシートに押し付け、硬く尖った肉槍を少女の蜜口に押しつける。ユイもまた、ベッドの上に膝を立て腰を持ち上げ、大きく開いた脚の付け根をクロスの方へと押し出した。

生贄を杭が貫くかのように、クロスの肉杭が荒々しく少女の細孔を穿ち貫いてゆく。

「んああ……………っつ!!」

にゆぶりと淫らな音を響かせて、少女の秘孔はたつぷりと蜜を溢れさせた。雄犬の生殖器は、一息にその根元まで深々と少女の胎内に打ち込まれていたのである。

息の合った交合の手際は、この光景が何度となく繰り返されたものであることを想起させた。

「つ、は、あ……………つ、はい、つちやつた……………つ、んつ……………ッ」

肺を押し上げるほどに、身体の奥深く突き上げられる肉杭、その熱さを、硬さを全身で感じながら、ユイは枕を抱く指に力を込めた。すっかり引き伸ばされた小さな膣口が、ぶちゆり、と粘液をこぼしてシートを汚す。

大型犬の生殖器を躊躇いなく受け入れた少女は、大きく目を見開き、はー、はーと大きく息をつきながら、緩やかに腰をくねらせ、交合の間合いを測っていた。

「……………やああ……………クロス、おちんちん、……………おなかの、奥の方まで、届いてる……………よおつ……………」

「あおんっ……!!」

雄犬がぶるりと下半身を震わせると、ユイはきやうつと声を跳ねさせた。お互いの体格差を考えれば、とても受け入れることはできなそうなサイズの大きな肉杭だが、ユイは己の身体を引き裂きかねない雄の剛直を受け止め、快感を得るためのコツを既に理解していた。

はち切れんばかりの獣欲の詰まったクロスの生殖器を、小さな身体を一杯に使って深く飲み込んでゆく。

「う、あはあ……ッ」

少女の狭い孔はねつとりと獣の剛直を啜え込み、圧迫感とともにみっちり詰まった柔肉でペニスを押し返そうとする。浅いながら日頃の愛の日々で発達し、複雑に折り重なった粘膜壁が幾重にも獣の生殖器に絡み付き、ぐいぐいと締め付けるのだ。

クロスもパートナーの愛撫に負けまいと後ろ肢をシーツの上に踏ん張って、なおぐいぐいと力強く腰を押し付けてきた。乱暴に半分ばかり引き抜かれてたペニスが、くねるように角度を変え、再びユイの孔奥へと押し込まれる。

「ひゅああうっ!? や、やらあ……ッ」

うねるような内側からの感触が、少女の敏感な部分を擦りあげる。ユイは背中を反らし、快感に喉を反らして甘い声を上げた。

「んにゅあああああ……っ♪」

誰よりもお互いを知り尽くしたパートナー同士の間は、たちまち二人を快楽の頂きへと押し上げた。強い圧迫感と共に、押し出されては再び突き込む——二人の息はぴつたりと噛み合い、愛の共同作業とも言うべき前後運動を繰り返す。獣の荒々しい律動に揺さぶられることに、敏感な少女の官能は否が応でも高まってゆく。飼いだの逞しい四肢に組み敷かれ、ユイはシーツの上に押しつぶされんばかり。あどけない少女は、大好きなクロスのおちんちんが与えてくれる快感に、夢中になって甘い声を上げた。

「ふああ……っ、んや、あ、も、もう、そんな、お、奥、こっこつってしたらダメ、っ、あ、だ、だめえ……っ、や、も、もう、いつちゃ……っ……!!」

逞しい下半身に力を漲らせ、クロスが挿入を速めた。蜜を吹きながら、細く狭い孔を赤黒い生殖器が激しく出入りする。可愛い少女の唇は唾液の糸を引いて半開きとなり、白い喉は嬌声をオクターブ跳ねあげて反り返る。

「あ、あうあああ、あっ」

早々と少女の身体を絶頂が突き上げた。白いお尻の谷間、薄紅色をしたユイの可愛らしいお尻の孔がひくついて、一度ぶくつと膨らんでから、一気にきゆうつと窄められる。同時に少女の柔孔の奥、柔らかく蠢きたいやらしいひだひだが、たつぷりと蜜を溢れさせながら、巧みにクロスの肉杭を締め付けた。

大きく節くれだった赤黒いペニスが、激しく熱い先走りの白濁を噴き上げる。快樂の高潮に押し上げられながら、ユイはとくとくと激しさを増す下腹部の脈動を感じていた。

「っはああ……っ、はあ、はあ……っ……んう、……も、もうイっちゃった……あ」

ぞくぞくと背中を震わせ、ユイは熱い吐息をこぼす。そのまま舌を伸ばしてきたクロスと熱いキスを交わし、その頭を抱き寄せるようにして目を細めた。

もう一方の手で、そつと——自分の下腹部をやさしく撫でながら。

「んう……おなかの奥、どんどん感じやすくなっちゃってる……かも……。ん……もお、……これ、ぜんぶクロスのせいだよ……？」

少しだけ悪戯っぽく歯を覗かせ、ほにや、ととろける笑みを見せるユイに、クロスは情熱的なキスで答えた。獣舌の巧みな愛撫が少女のあどけない顔をべちゃべちゃにしてゆく。大好きなクロスの匂いを胸一杯にして、ユイはきゆうとはつきり自分の『ナカ』が蠢いて応じるのをユイは感じ取っていた。

おなかの奥深くまで、愛しい相手を感じる歓び——深く繋がり合ったまま、クロスとユイはまた腰を動かし始める。

「ふあああ……う♪」

「わおうんっ!!」

同時に、愛しい相手に身体も心も魂まで支配される服従の歓びが、深くユイを満たして

いた。雄がその身に限界まで溜め込んだ、煮え滾るほどの激しい獣欲を、全て残さず、余すところなくその身に受けとめる。それは雌にとってこの上ない悦びなのである。

「んう、んっ、あ、んあ、あっ、あや、やらああッ、それ、そこ、こすっちゃ、っ、だめ、へんに、へんになっちゃうっ……クロス、くろうう、意地悪しないれえっ……」

再び腰の律動を速めるクロス。下半身がぶつかりあつてばちゅんばちゅんと淫らな音を響かせる。深々と身体の奥を突き上げられる逞しい滾りに、ユイは呂律の回らない舌を切なく喘がせた。

赤黒い肉の塊が、少女の狭い生殖孔を構わず前後し、淫蜜を掻き回すようにして抽挿する。逞しい獣の下肢があらんかぎりの力で叩きつける肉杭は、絶妙の角度で少女の膣中をくねり、跳ねる。根元深くまで埋め込まれた野太い剛直が引き抜かれ、少女の股間からは衝撃の透明な蜜が飛沫上がる。

一度目の射精を受けとめたユイの柔孔からも泡立った白濁が吹きこぼれ、ベッドのシートを汚してゆく。

「——!! や、ま、まって、待つてクロス、っ、やら、っ、ま、また、汚しちゃう、っ、だめ、クロス、だめええっ」

ふいに、ユイは激しく身を戦かせた。ユイ自身にはどうしようもない、深い快感のうねりが押し上げてきたのだ。咄嗟の事で暴れようとする少女だが、クロスはそれを意に介さ

ず、さらに深くペニスを少女の細孔へと挟り込む。

嵐に翻弄される小舟のように、少女の未成熟な身体はたちまち絶頂の頂へと突き上げられ、濃密に煮詰められた快感を何度も弾けさせてしまう。

「あ、ああ、やら、も、もれ、漏れ、ひやう……っ!!」

ユイは堪え切れずにびくつと腰を跳ねさせた。

ぶつ、ぶしゅううう!! 嬌声を跳ね上げ、咄嗟に枕に顔を伏せたユイの下半身から、びちやびちやと激しい潮が噴きこぼれる。

「っんあ、あ、や、やら……や、あ……っ」

噴き上がる透明な雫がシーツをびちやびちやと打ち付ける。

ユイは赤くなつた顔を覆うように枕に噛みついていた。以前はこんなことはなかったのだけれど、一度クセになつてしまったせいなのか。ユイのこの「潮噴き」はもはやいつものことだった。

「んあ……や、とまん、ない……ばかあ……っ、クロスっ……だめつて、ゆつてるのにい……っ」

なおもぶしゅうと噴き上がる透明な飛沫。腰を震わせ、ユイは真つ赤な顔で抗議した。クロスと言うパートナーはあれど、性について詳しい事まで知らないユイには、絶頂の徴もオモラシと大して変わらない羞恥なのだ。

「つ、ま、また……シーツ、だめになっちゃう……のに……つ」

噴き上がる潮と蜜液、さらにはクロススのペニスからぼたぼたと垂れ落ちる白濁。クロスとユイが心ゆくまで交わっていると、もうそのベッドはどうしようもないくらい汚れてしまう事がほとんどだった。シーツや毛布、身につけていた洋服も台無しになりかねず、ユイは両親に気付かれないように後始末をするのにも苦労していた。

今のところクロススが悪戯したとごまかすことで事なきを得ているが、これまで粗相など滅多にすることのなかった行儀のいいクロススがそんな事を始めた事に両親は不思議そうに首をひねっている。

実際、いつまでもそれで済ませられるわけもなく、ユイはこつそり溜めていたお年玉をはたいて、ベッドの替えのシーツを何枚も用意する羽目になった。

正直、ちよつと痛い出費ではあったけれど。大切な旦那様であるクロスとの、秘密の準備のために、デパートのレジに並んでいるのだ——と想像するだけで、実はユイも満更でもない。

なんだか自分が本当にクロスのお嫁さんになったみたいで、高鳴る胸を抑えきれなかったのだ。

そんな事はお構いなしに、クロスはユイをキモチ良くすることに懸命だった。より密着の高まるように腰を押しつけ、浅めにペニスを抜き差しして少女の細孔の入り口を擦る。

「ああああつ、クロス、くろすう……つ、おっきいの、すごい、おなかに……こすれるう……♪ すごい、よお……」

ぎゅつと抱き締めた枕に、ユイの唇からこぼれた嬌声と泡立った唾液が染み込んでゆく。一番気持ちいいところをもどかしく擦られる刺激に、甘い電流がびりびりと腰骨からおなかの上へと伝播し、少女の官能を揺さぶった。

ベッドの上で重なれば、クロスの身体はユイよりもふた周りも大きく逞しい。体高80センチの体格は成人男性とも遜色なく、クロスが力いっぱい腰を振るうとそれだけでユイはガクガクと揺さぶられるほどだった。

クロスも何度もユイの膣内に射精をし、十分に興奮しはじめている。雄犬の生殖器の根元には大きな精瘤が膨らみ始め、いよいよ本番に成ろうとしていた。この頃になると、ユイはクロスの抽挿だけで身体をベッドの上から引きずり下ろされそうになってしまう。

「あつ、あくうう……ふあ、ああああああ!!」

ぐい、とクロスが力強くユイの身体を持ち上げた。

深々とおなかの奥まで肉杭に貫かれたユイは、ちようどクロスのペニスに引っかかるようにふわりと身体の浮くのを感じる。

突如の浮遊感に耐えかね、びく、とユイが達する。しかしこの程度では、まだ全然終わりでなんでもない事をユイとクロスはお互いに熟知している。この交わりはそれぞれが

感じ合いなながら、見上げるだけでも背筋がぞくぞくとするような絶頂の頂きを踏破するものだ。

「あ、あつ、ま、また……クロス、つ、またいつちやうつ……、また、あああつ!!」

本来はユイのほうが背中に乗れるほどに体格の違う二人だ。ユイが下になってクロスを支えるのは無茶にも思える。それでもユイは砕けそうになる膝を柔らかなシーツに突き立てて、今にもひしやげそうな腰を保ち、クロスの獣欲を受けとめる。

いくぶん肉が付いてきたとは言え、ユイの細い腰や背中はまだで折れそうにしながら、クロスの怒張を根元まで受け入れるのが精一杯だ。そうして延々と、一方的にこね回される胎内はいつしか熱くとろけ、まだまだ狭い柔襪をきゆうきゆうと疼かせ、細い柔孔をくねらせて、クロスの精を絞り取る準備を始めている。

「つあ、や、やつぱり、あたし……前より、ずっと……、いやらしい子に、なっちやつてる、かも……っ」

クロスの長い舌を受け止め、ユイはぎゅうと枕を握り締めた。

とく、とくと存在感を増す下腹の脈動。ユイは優しくおなかを撫で、「そこ」に秘められた大切な存在を感じ取った。

「んあ……ぶっ」

背中をよじって反り返るユイの唇に、クロスの大きな舌が押し付けられる。熱い獣の吐

息とべちやべちやとうねる巧みな舌が、少女の口腔に滑りこみ、少女の小さな舌を絡め取った。舌先だけでユイの秘所の敏感な場所を巧みに探り当て、快感を掘り起こすクロスの舌によるデープキスは、たちまち少女を夢中にさせる。

「んっ、ふ、あ、ふ、んう、ちゅ……………るっ……………」

ぬぶっ、ぬぶぶっ。ふかくこね回される少女の秘孔が徐々に深さを増し、泡立つ蜜を噴き上げてますます大胆に犬の生殖器を飲み込んでゆく。クロスのパニスの根元は既に大きく瘤を膨らませ、それが秘所の入り口をぐりぐりと押し付け擦りあてられるとともに、小さな陰核を押し潰す。

「んんんん……………っ♪」

稲妻のように走る快感に、ユイの柔孔はびくっとうねり、激しくペニスに絡み付いてはきつく締め付ける。

三度、獣のパニスが爆発し、どくどくと注ぎこまれる白濁が少女の腰骨を震わせる。熱いマグマの滾りが少女の胎奥、ぶくりと熱をもって膨らんだ子宮の口へと噴き付けられた。
(きもち……………いい……………)

激しい荒波のような絶頂のうねり、その合間のこの上ない女の喜び、法悦の境。本来ならばまだ味わう事はできないはずの悦楽のなかにたゆたい、ユイははー、はー、と肩で息を繰り返しながらクロスにそつと身を寄せた。

「ね、クロス、……ほら、わかる？ あは、……おなかで、赤ちゃんも、キモチいいって……いつてるよ……？」

やんちやなパパの旺盛な獣欲に呼応するように、新米ママの下腹で強く主張をする小さな生命。それは、二人の交わりが結びついた奇跡の結晶。

そう。ユイのおなかの中には、今まさに——クロスとユイ、二人の赤ちゃんが息づいているのだ。

まだ小さいのにはつきりとユイには分かる。とくんととくと脈打つ鼓動を感じようと、ユイは下腹をなんども撫でた。愛しいクロスに口づけを交わし、その頭を抱き寄せて、耳元にそつと囁く。

「ね、クロス……もつと、もつと、教えてあげてね……♪ おなかの中の、赤ちゃんに……こうするのが、こうやって、えっちするのが、とつてもキモチいいってこと……教えてちようだい。……クロスと、あたしの赤ちゃんに！」

クロスとユイ。二人が初めて結ばれてから二月——

遅しい雄犬と、いたいけな少女。晴れてパパとママになった初々しいふたりの蜜月は続いていた。

「んにゅああ……ッ♪」

いとけない少女の秘所がよじれ、根元近くまで深く埋まった赤黒い獣のペニスぐるりと回転する。乙女の秘所には歪に膨らんだ雄の滾りがしきりに出入りを繰り返し、少女の噴きこぼす蜜は白濁と混じり合って泡立たせ、ベッドの上にとろとろと溢れおちる。

絶え間なく噴き上がる大型犬の射精を柔孔の奥に受け止め、今日十数度目となる受胎行為にユイは嬌声を上げる。

一人用のシングルベッドを軋ませ、大型犬の腰が無防備な少女の下半身へと激しく打ちつけられ、淫蕩にくねる薄桃色の花卉を掻き回す。細い身体は少しでも離れまいともこの毛皮を抱き締め、濃密に絡みつくばかりだ。

シーツを湿らせる汗、立ち昇る湯気、むせ返るほどに立ち込める淫密な匂い。何度も噴き出した蜜と白濁でシーツはべとべとに汚れ、執拗に犬舌で舐め回された少女の顔もどろどろの有様だ。

そんなユイの表情は恍惚に蕩け、唇から溢れる涎も堪えることができないほど。抱えた枕には嬌声を堪えるため噛み付いた歯形が残り、それでも押さえ切れない喘ぎがリズム良く跳ね上がる。

「んあ、つ、あ、く、クロスう……っ♪、っぞ、そこ、ダメ、だめえ……♪　っあ、こっこつ

つて、しちや、だめなのお……っ♪ あ、あ、赤ちゃんの場所だから、あかちゃんのいるところだからあ……♪ そんなに、きもちいい、こと、しちや、だめ……だよ……っ♪」

歪な形に張り詰めた獣の生殖器が、まだ咲き始めたばかりの早熟な花卉の奥へと押し込まれ、その圧倒的な熱量で柔孔をこじ開け、蜜壺を捏ねまわす。まだあどけない少女はすでに胎内奥で熱を持って疼く『そこ』の存在をはつきりと意識できるほど、性の交わりの手管を体得していた。

仰向けの身体を押し潰さんばかりに深く覆いかぶさってきたクロスの荒い息遣いが、ユイの耳元に響く。だらりと伸びた舌が少女の顔のすぐ傍で揺れ、ふいごのように熱い吐息を吐きかける。獣臭い息づかいがますます激しくなるにつれ、叩き付けられる腰が力強く少女を突き上げる。

二十センチを超える獣のペニスを、小さな蜜口から、根元まで余すところなく胎内に受け入れて。

すっかり綻んだ細い柔孔の粘膜襞を掻き回す愛しいパートナーの滾りを、ユイは全身を持って受け止めていた。

「あ、あっあ、や、それ、それ、だめ……っ、ま、また、キモチ良くなっちゃう……んんう、ああああああっ♪」

おなかの中の小さな生命を意識するようになってから、少女の身体はますます敏感にな

り、より深く女の子の喜びを感じることができるようになっていた。

ユイのおなかはまだ服の上からではほとんど目立たないけれど、そこには、ユイとクロスの愛の結晶——ふたりの心が結びついた小さな生命が芽生え、息づいているのだ。日々、両親の愛を受けて生まれ、その鼓動を強くするおなかのなかの小さな生命は、ユイの心にまで大きな変化の兆しを与えていた。

大切な赤ちゃんを宿し、大きく膨らんだ生命のゆりかご、子宮に圧迫されて膣奥は押し下げられ、以前よりきつく狭くなっている。同時に子宮口は熱くふくらんで火照り、柔孔の一番奥にぶくりと口を突き出していた。

妊娠によって感じやすくなった少女の身体はそれまでとはまるで違う感覚をクロスにもたらし、敏感になった膣内を犬の逞しい肉杭が突き上げ、擦るたびに、ぶくりと発達した膣口はそれをねぶるように啞え、さらにとがった先端を包み込んで舐め上げる。

腫れぼったく膨らんだ子宮口は、深く押しつけられたクロスの先端に吸いついた。

「んう……やあ、クロス、おく、こつこつしちや、ダメ、ダメだよおつ……あ、あだし、また、キモチ良く、なつちや……つ、ママなのに、おなかに、赤ちゃん居るのに、キモチ良くなつちやう……よお……♪」

「わおんっ!!」

言葉とは裏腹に、ユイは自ら突き上げるクロスの肉杭に合わせて怪しく腰をくねらせ、

挿挿にねぶりつくように腰を引いては押しかえす。腹腔内で厚みを増した柔孔の肉がきゅほ、にりゅ、と逞しいオスの滾りを受け止め、妖しく淫らに包み込む。まるく膨らんだおなかがつくりと揺れ、クロスの腰の動きを存分に味わう。

「んあ、あああ……あああ……ッ」

細い背中がうねり、がくがくと少女の腰がヒク付いた。母となる事でしか味わえない快感を、悦楽を、少女は懸命に背伸びして堪能しているのだ。

「く、クロスつ、そこ……その奥つ、だめえ……そこ、あかちゃんのいるところだから、つ、あかちゃんのトコと、ぶつかっちゃうよお……つ」

だめ、だめとうわごとのように繰り返して訴えるユイ。しかしその表情は熱く火照り、同時に少女の柔孔の奥は言葉とは裏腹にきゅうつと粘膜襞をうねらせて、胎内奥深くに愛しい相手の衝動を誘おうとする。

それに応えてか、熱く疼いた子宮の入り口に狙いを定めるように、クロスは怒張を思い切り突き上げる。

「んきゅう……っ♪」

受胎して以来、熟すように絶えず熱を持って潤むようになった生命のゆりかごは、その入り口をぼつてりと厚く膨らませ、突き出した唇のように敏感な場所となり、些細な刺激ですらユイに法外な悦楽をもたらすようになっていた。一度つつかれただけでもユイは言

葉を失つてしまうほどだ。

それでも飽きたらず、クロスは執拗にユイの膣奥の神秘のゆりかごの入り口を執拗にノックした。濃厚なキスを交わす子宮口と肉杭の先端が、粘つくような液を迸らせる。

まるでそれは、今ユイの胎内に宿った命の代わりに、自分がそこに押し入りたいというような行為にすら見えた。

「んうああ…ひゃ、らめ、つ、だめえ……クロスう、あ、そこ、だめ……つ、だめえっ」
快楽のうねりに飲み込まれ、上下すらも定まらなくなる身体を必死に繋ぎとめんと、ユイはシートに立てた爪に力を込め、ベッドにしがみ付こうとする。少女の小さな身体で逞しい獣の交合を支え切るのには全身を使わねばならないが——背筋を貫く蕩けた桃色の衝動に、ユイは既に振り回されんばかりになって、身体の自由が利かない。

「ら、らんぼうにしちや、だめなのっ……、く、クロス、う、……ほ、ほら、あかちゃん、びつくり、しちやう……からあっ!!」

だが。一度堰を切った獣の欲望は、ユイを顧みる事はなかった。かつての伴侶を失い、長らく絶えて交合のパートナーに立候補した少女の未成熟な肢体を、余すところなく己の遺伝子で塗り潰さんばかりに、クロスは激しく腰を打ちつける。

「わおうっ……!!」

「ふやああ……っ!? んう、あ、あ、すご……っ、あう、びゆるびゆるって、して……ふ

あッ、あ、ああ、く、クロスの、熱いの、いっぱい……いっぱい、出てるう……ッ」

少女の狭い膣内に激しい射精が迸った。ペニスが脈打ち、滾る生命のスープが猛烈な勢いで吐き出される。焼け付くほどに滾るクロスの生殖器は、まるでポンプのように少女の胎内を白濁で塗り潰してゆく。

人間のそれとは大きく機能の異なる生殖器は、中心の軟骨を強張らせ、ユイの細い身体を根元まで貫かんばかりに大きく膨らんでいた。

歪な型のそれは、しかし、ユイの知る唯一の男性の証、愛しい相手の素敵な『おちんちん』であった。まぐわう相手は自分しか知らない若い雌を、二度と他の雄に奪われまいとするかのように。心も体も隅々まで、徹底的に征服せんばかりに。野生の滾りの中に大型犬が吼える。

「ふああ……やら、おなか、とくんて、びくびくつて、ゆつてるう……っ」

小さなママのおなかの中に、二人の愛の結晶が宿り、息づいている事を知りながらも、クロスの獣性は決してユイを逃そうとはしていなかった。

——それは、自分の遺伝子で作られた子供すら一顧だにしない偏執的なまでの生殖欲求。およそ、生命は自分の血を受け継ぐものを育てるために生きている。

だから、こうしてクロスがユイを求め続けるのは正しいことだった。愛するものを失い、一人孤独に耐えていたクロスの渴望に誰ひとり気付かずにはいた中で、ユイだけがクロスを

受け入れたのだ。

そしてその子供を孕み、育てると応えてくれたのだから。

「あああああ……っ」

うつ伏せのまま枕に爪を立て、ユイが腰を震わせる。根元まで肉杭を突き込まれた細孔はぬぶぬぶとネバ立つ蜜に溢れ、すっかり充血した粘膜孔は、別の生き物のようにクロスの肉杭を舐めしやぶる。その様はすっかり成熟したメスのそれだ。

始めて関係を持つてからまだ一月と数週間——けれど、ユイはもう完全にクロスの“おちんちん”を気持ち良くさせる方法を心得ていた。

クロスもまた、この小さな雌の扱いを熟知していた。何年も連れ添ったパートナー同然に、少女の未成熟な肢体の秘密を知り尽くしていた。

クロスは深く腰を落とし、少女の胎内奥深くに突き立てた肉槍をびくびくと痙攣させた。絡みあつた淫肉がとろけあい、ひとつの命になろうと繋がりあう。滾る肉杭の先端がぶくりと膨らみ、びゆるびゆると灼熱の白濁液を迸らせた。少女の吐息と共に下腹部が震え、美味しそうにそのどろどろを胎内奥深くまで飲み込んでゆく。

「ふ……はあ……っ」

子宮が、柔孔が、生命の素を嚙下する感覚にぞくぞくと背を震わせ、快感の頂きに昇り詰めたまま、ユイはとろんと情欲にとろけた目でクロスを振り返る。

胎内に弾けるクロスの射精は、まるでソーダを一気飲みしたかのよう。焼け付くほどの熱い刺激がおなかの奥に破裂するのを感じながら、ユイはぎゅつと枕を噛んだ。

ユイのあどけない生殖器は、きめの細かい柔襲を波打たせ、渴いた大地が撒かれた水を残らず吸い上げるようにクロスの吐き出した生命の素を飲みこんでゆく。それがたつぷりとおなかの奥底にまで届くのを感じ取り、胸を満たす陶醉に目を細めた。

「あは……っ♪、ねえ、クロス、……そんなにいっぱい、出したら……赤ちゃん、ふたごに、なつちやうよおっ……♪」

きゆう、と子宮の奥底で疼く胎動を実感し、ユイは悦楽に声を跳ねさせた。

節操なく蠢き、まだ硬さを保ったクロスのペニスをしっかりとくわえこんでうねる細い腰は、まるでクロスの生殖器が絞り出す精液を残らず飲みこんで、もう一度孕んでしまおうとしているかのようだ。

おなかに赤ちゃんを宿しているはずなのに、旺盛な旦那様に答えるべく、おさな妻になったばかりのユイも貪欲な性欲を滾らせていた。新婚のふたりにとつて、夜の営みは何よりも大切で、かけがえのないものだ。愛しい相手を求めあい、深く深く、身体も心も繋がりがあって、何度も何度も、限らない愛を確かめ合う行為なのだ。

「クロス……ねえ、もつと、もつと、いっぱい、熱いの……あたしの、おなかにちようだいつ……♪ あ、あたし、クロスの赤ちゃん、いっぱい産んであげるから……ね？ クロ

スの、あかちゃんつ、もつと、もつとたくさん、産みたい、よお……っ♪」

拙い語彙から選ばれるのは、まぎれもない愛の言葉。

何よりも愛しい相手を求め、請い、願い、深く繋がりあうことをせがむユイを、逞しい四肢でしつかりと押さえつけ、クロスが吠える。

「んむううっ、ちゅ、れるっ……♪ クロスっ……好き、大好きっ……だいすきだよお……っ」

愛する相手に伝える『好き』以上の表現を知らないユイには、いまの自分の胸をいっばいに満たしている気持ち言葉を言葉にして伝える方法が分からない。

だから、その百分の一でも、千分の一でも届くように、『好き』という言葉を繰り返す。そうして想いを口にすればするほど、ユイの心はきゆうきゆうと切なく声を上げ、よりいっそう膨らんだ愛しさに満ちてゆく。

これを多分、しあわせ、と呼ぶのだと。

ユイはそう思った。

「は、っああ、う、ああ、あつ あ、おな、か、おなか、じんじんするう……あかちゃん
の居るトコ、とくとくって、ゆつてるよお……っ」

とくとくと下腹の熱が疼きを増す。クロスにつつかれるキモチいいところの、もつと奥。大事な命の芽生えている場所。そこが声を上げている。小さなママに訴えている。

切なさに耐え切れず、ユイはクロスの首に回した手にぎゅうつと力を込めた。

身体の奥深くからじんじんと響いてくる刺激が、これまででない深く濃い快感をもたらした。ユイを新たな法悦のステージへと招く。あるいは、こうしてユイがクロスと繋がることの証を得たことで、神様がご褒美を与えてくれているのかもしれない。

「あ、あかちゃんも、あかちゃんもっ、いっしょに、キモチいいって、ゆってる……!!
う、あ、っう、クロス、クロスう……っ!!」

むしゃぶりつくようにクロスの大きな口とキスを交わし、お互いの舌を絡めあう。ぎざぎざの牙は、ちよつとでも油断したらユイの小さな舌なんて噛み切ってしまうかもしれない。でも、クロスがそんな事をしないのをユイは誰よりもよく知っていた。

ユイはクロスのお嫁さんなのだ。大事な大事なパートナーで、どんな時も一緒の仲。そして今、ユイのおなかには、クロスの赤ちゃんがいる。小さな小さな、けれど何よりも大切な、二人の赤ちゃんが。

「あ、あたしも、あかちゃんも、だいすきっ……クロスの事、ふたりぶん、だいすきだよ
お……っ」

種族も、年齢の差も超えた二人の交わりは、いよいよ佳境へと向かう。

「あ、あ、く、くろす、っ、や、お、おつきく……なっつ……あ、あああつああ、あ
ううっ……っ!!」

閉じ切らない唇からこぼれた涎が、枕を汚す。これまで堪えていたのか、無垢な細孔に深々と埋め込まれていた獣の生殖器が、その根元をぶくりと膨らませ始めた。精瘤がみるみるうちにユイの狭い膈内を占領し、噛み合うようにながちりと、少女の肢体を固定する。

ちようど、生殖器の先端が充血した子宮口を捕えるような体勢で固定され、さらにクロスはユイの身体をpushさえつけるように、体重を乗せて後ろから押し掛かって来た。

むぎゆうつ、と押し潰され、シーツに顔を押しつけて、ユイは肺の中から息を絞り出されて苦しい声を上げる。

同時に、ユイの下半身を串刺しにしたクロスの生殖器が、爆発するように生の滾りを噴き上げた。火山の噴火のように、煮えたぎる性のマグマが少女の可憐な子宮を直撃する。

「ああ、あああああ、あ。ああ、つああああ!？」

目を見開いたユイの身体の奥に、なお深く己を埋め込むようにして、クロスは力強く脚を踏み鳴らし、遅しい後ろ肢を戦かせて獣の絶頂を解き放った。

「うあ、あ、つああああ、や、ああ、あ、く、くろす、あ、だめ。だめつ、あ、あたま、まつしろ、つ……いあ、あー、あつ、あああ————ツツ!!」

そうして二度、三度、四度。——都合、五度に分けて。クロスは長く大量の射精を、少女の胎内に打ち込んでゆく。まるで火山の大噴火。ペニスの根元の精瘤を完全にユイの膈口に埋め込み、容赦のないドッキング状態での、本当の獣射精だ。ユイのおなかにいる赤

ちやんの事などお構いなし、新しく排卵と受精を促さんばかりの猛烈な種付けである。

逃げ場を失った生命のマグマは、妊娠したばかりのユイの胎内を余すところなく侵食し、少女の理性を叩き壊して、歓喜の頂きへ押し上げてゆく。

たつぷりと濡ればそつた秘裂を漲る生殖器が貫いたまま、結合は1時間あまりにも渡つて続いた。

「ふああああああ……」

その間、ユイが数えた絶頂は、短いものも含めて30回を超える。ほとんどイキつぱなしのまま5分以上、声を上げ続けた事もあった。

クロスを思いやる後背位での交わり。獣の交わり。この体位を続ける限り、クロスはユイを必要以上に気遣う心配ことなく存分に動くことができ、なんどもなんども絶頂にのぼりつめる。そのたびに吐き出される怒涛のような白濁が、胎内に余すところなく注ぎ込まれてゆくのがユイは好きだった。

激しくたかぶる肉の塊は、小さなママの、まだ未発達な膈を貫いて、やすやすと子宮の入り口にまで到達する。薄い肉に覆われた細い少女の身体を突き上げ、こね回し、蹂躪する。

体の一番奥をこつこつと突き上げるボルチオ感覚に、ユイは妊娠セックスの途方もない快楽に溺れ、歓喜の園へと導かれたまま、唇からこぼれる涎を拭うこともできずに、幸福

の頂きで嬌声を上げ続けた。

胎内にしつかりと感ずる、小さな命の鼓動を感じながら――

「うえ……キモチ悪い……」

トイレから戻るなり、ユイは呻いてベッドの上に寝転がった。

テーブルの上には食べかけのチーズケーキと、転がったフオーク。

今日は珍しくお父さんもお母さんも家にいない。一人で勉強をするのにも飽きてしまったユイは、やりかけの宿題を放り投げてカーペットに寝転がり、少し早い3時のおやつを始めていた。

「ううーっ……」

頬を膨らませてベッドの上、気分が落ち着くの待つ。せつかく大好きなチーズケーキがあるのに、匂いが妙に鼻について受け付けない。最近なかつた吐き気までやってきてすっかり食欲も失せてしまった。慣れたせいでいくらか余裕はできたものの、時折やってくる不調はいまもユイを苦しめていた。

一番ひどかったのは二週間くらい前で、今も時々、急にキモチ悪くなって吐いてしまっ

たり、急におなかがいっぱいになって全然ごはんが食べられなかったり、逆にすごくおなか
かかすいてしまったり、ユイの食事は不規則だ。

お医者さんには良く原因が分からなかったらしく、おそらく精神的なものだろう、とも
つともらしいことを言っていたけれど。

ユイにはもつとはつきりと、その原因が分かっている。

「……もう、元気だなあ……あたし、こんなに困ってるのにつ」

おなかの中に芽生えた小さなのちを愛おしげに撫で、ユイはちよつとだけ口を尖らせ
る。

身体の奥深くにクロスが凄まじい勢いで迸らせる『赤ちゃんの素』を、無防備なまま一
生懸命に受け止め、ユイの子宮はあれ以来じんじんと熱く火照りっぱなしだ。おなかの奥
でとくとと疼く小さな脈動は日に日に存在感を増し、今では折りに触れてユイもそれを感
じ取ることができるようになった。

クロスと身体を重ねるまで、意識したこともなかった——ママになるための器官。大切
な赤ちゃんをはぐくみ育てる場所。ユイの子宮はいつしかおなかの奥にコリコリと硬い感
触を膨らませ、じんと疼きを感じさせるほどに大きくなっていた。

「はああ、ママになるのって大変なんだなあ……」

ぼす、とソファーに寝そべって、また重みを増したおなかをそつと撫でる。たしか、近

所のお姉さんがママになる時に聞いたら、悪阻というのは3ヶ月くらいでおさまるはずだというのを覚えていたのだが——どういうわけかユイの不調はいまも続いている。

……無論のこと、ユイに、犬の受胎期間が人間と違って、およそ50〜70日という短期間であるという知識はない。多胎を形成することが通常の犬の妊娠期間はバラつきが大きく、体調の変化も一様ではないということも。

……もつともそれを当てはめたところで、少女の胎内で育つ、ヒトとイヌの種を超えた生命の妊娠観察経過など推し量れるわけもないのだが。

ともあれ、ユイは少女らしい純朴さと、無意識のうちの深い母性でこの体調不良を受け止めていた。キモチ悪いのは嫌だったが、けれどそれも愛しいクロスの子供が順調に育っている証だと思えば、自然ユイの胸は高鳴るものだ。

「……わう？」

かつかつと窓ガラスを叩き、クロスが庭から身を乗り出してユイの方を窺ってくる。ぐるぐる芝生の上を歩き回り、落ち着きなく何度も窓に前脚を乗せて顔を押しつけてくるクロスに、ユイは思わず吹き出してしまった。

「あは……ありがと。クロス、心配してくれてるんだ」

胸に込み上げてくる温かい感情に、ユイはそっと目をぬぐう。

まだ頭も重く、気分も晴れなかったが——ユイは窓を開け、ベランダへと出てそっとク

口スを迎え入れる。

「……いつもみたいには、できないかも、だけど……お散歩、いこうか？」

「わおんっ!!」

大きな尻尾を振ってこたえるクロスに、ユイは満面の笑顔で頷いた。

それは、とても良い考えに思えた。外の空気を吸えば少しは気分も良くなるかもしれない。そつと大きな頭を撫でて、ユイはクロスの首輪を鎖から外し、リードへと付け替える。支度を済ませ、しっかりと戸締りをして家を出た。

大通りのスーパ―から住宅街に入り、公園と空き地の向こうの路地をしばらく進むと、鬱蒼と茂る森が露わになる。もう十年以上も人の手の入っていないことがわかる木々は、伸び放題の枝と茂みを重ね合わせ、錆びた金網をがっちり補強している。

それでも苦勞して覗きこめば、その隙間から、森の奥にひっそりとたたずむ、朽ちた屋根と十字架を見つけることができる。

ユイが生まれるよりも前に、ある事情で放棄された教会——この場所にそんなものがあることを知っている生徒は、ユイのクラスにもほとんど居ない。

学校では危ないから近付いちゃいけない、と教えられているこの廃教会が、ユイとクロスの最近の散歩コースだった。

「わ、クロス、そんなに引つ張らないでよおっ……」

「わう、わんわんっ、わおおんっ!!」

しばらく続いた雨のせい、クロスはすっかり退屈していたらしい。実に5日ぶりの散歩に喜ぶクロスは、鈍った身体を存分に伸ばすようにリードを跳ねさせて道路を駆けまわる。

元々、ユイを軽々と背中に乗せられるほどの大きな身体をしたクロスだ。綱引きをしたってかかないっこない。まして今、ユイは赤ちゃんのいるおなかを抱えて走るのも精一杯なのだ。久しぶりのお散歩に喜び、力いっぱいリードを引っ張られるクロスに、ユイはほとんど引きずられるように付いていくばかりだった。

ユイは足をもつれさせないよう、慎重にクロスのリードに従う。少女の手は自然とおなかに添えられ、何があってもそこを守ろうとする。これもまた無自覚ながら自分に芽生えた命を自覚する、自然な母性の発露だった。

「わうっ、わんっ!!」

「ぎやーあ、ありがと、クロス♪」

もうすっかりこの場所の事を覚えたクロスは、待ち切れないというように力強く尻尾を振ってユイを急かした。小さな段差に躓きそうになったユイをしっかりと支えながら、クロスはユイの先を進む。

ぱっと見たくらいでは分からないが、伸び放題の植え込みが茂る路地に沿って10mく

らい歩いたところの金網には、ちょうどユイが通れるくらいの穴が開いていて、そこから植え込みの枝を掻き分けて中に入ることができる。

鬱蒼とした木々を抜けてしまえば、教会の周囲にはちよつとした広場があった。ひび割れたアスファルトに囲まれていたここは、昔は駐車場か何かだったのかもしれない。四方を囲まれた空から、柔らかな日差しが注いでいる。

そんな、周りからも隔絶された場所が、いまのユイとクロスのお決まりの散歩コース。ふたりの蜜月の場所だった。

夕暮れの公園の中に、誰もいないのを確認してから、ユイはクロスを伴って建物の隅にある雨ざらしのベンチに腰を下ろした。

「ん、クロス……」

ペンキの剥げかけたベンチの前、ちよこんと『お座り』したクロスの逞しい身体に、ユイはそつと身を寄せ白い毛皮に顔をうずめる。ふわふわのおひさまの匂いに、ユイの表情はすぐとろんと蕩けてゆく。

ユイはこれが大好きだった。クロスの雪みたいに白い毛皮に顔をうずめっていると、嫌なことも全部忘れてしまうのだ。クロスもその事は良く分かっていているみたいで、こんな時は嫌がりもせず、ずっとユイのされるがままにしてくれる。

ひとしきりそうして、深呼吸。やがて気分が落ち着くと。ユイはそつとクロスの身体か

ら顔を上げる。

「えへへ……ありがとう、クロス」

「わうっ」

クロスの小さな吼え声に頷いて、ユイはクロスの首に手を回し、首輪に繋がるリードを外した。クロスをこの首輪から自由にしてあげられるのは、こんな場所では出来ないことだ。ユイにはそれがとてももどかしく思えてならなかった。

(続きは本編で)

【奥付】

「すきすきわんこ・妊 体験版」

発行：平成 26 年 1 月 10 日

制作：良い子の諸君！

※作中の登場人物、組織、施設等は
すべて架空のものです。